

# カール・ビューラーの『言語理論』と文体論

山 取 清

## 1 はじめに

ビューラー(Karl Bühler, 1879-1963)の『言語理論』(1934)<sup>1</sup>は、まずパウル(Hermann Paul, 1846-1921)の『言語史原理』(1886)<sup>2</sup>とソシュール(Ferdinand de Saussure, 1857-1913)の『一般言語学講義』(1916)<sup>3</sup>の内容を比較することで始められている。それによれば、パウルの『言語史原理』は19世紀の言語学の成果が見事に整理された教科書であり、ソシュールの『一般言語学講義』は著者の方法論的懐疑を徹底的に反映した書物である。この評価は言語学の歴史に不朽の名を刻んだ偉大な二人の学者の研究方法の特徴を対照的に示しており、ビューラーの洞察力の確かさを物語っている。経験主義者パウルの用いた方法論はあくまで実証的であり、資料の収集と整理における徹底した姿勢からは、言語学者としての傑出した精神力と忍耐力を窺うことができる。そのパウルに対してソシュールには、理論的・方法論的な意味で明らかに天才の閃きのような何かがあり、ソシュールの直接の手による書物ではないにもかかわらず、『一般言語学講義』が今もなお読み手の想像力を掻き立てずにいないのは、そこにソシュールの類いまれな個性が反映されているからであろう。

ビューラーは『言語史原理』と『一般言語学講義』という性格の異なる書物を子細に検討し、学問的意義を確かめることによって、自らの史的立場をまず規定しようと考えたのであった。ビューラーの『言語理論』の特徴を一言で述べるのは非常に難しい。なぜなら、『言語理論』は上記の2著ばかりでなく、言語学・心理学・哲学をはじめとする多方面の研究から、実に様々な思想を取り入れて編まれていることが最大の特色の一つと言えるからである。しかし著者のそのような姿勢が単なる継ぎ接

ぎ細工に終わることなく、計算された統一体を形作っているのはまさに名人芸と言わねばならない。かつてビューラーと交友を持ち、大きな影響を受けた言語学者ヤーコブソン(Roman Jakobson, 1896-1982)は、ビューラーの『言語理論』を「言語の心理学を扱ったすべての著作の中で言語学者にとって恐らく最も内容の豊かな著作であろう」<sup>4</sup>と述べているが、このような積極的な評価は、著者の学問的知識の豊かさはもちろんのこと、何よりも言語という現象への心理学者としての鋭敏な眼と現実に立脚した冷静な観察に負っている。

また、学問的業績としての価値に直接には関係しないかもしれないが、敢えて付け加えるならば、ビューラーの『言語理論』は、『言語史原理』にも『一般言語学講義』にもないある種の「作品」としての魅力を持ち合わせている。つまり、この分野の文献としては珍しく、著者の文章の巧みさと、読み手を飽きさせない論の展開の妙味が、理論的な内容の書物をひとつの「作品」に仕上げているのである。「文体とは結局その人そのものである」と言われるのが真実なら、ビューラーの『言語理論』の「文体」もまた著者の思想に着せられた単なる衣ではなく、教養と人となりの所産でもあろう。したがって、筆者がビューラーの『言語理論』と文体論というテーマについて考えるきっかけとなったのは、『言語理論』自体への理論的関心と同時に、「作品」としての興味という二重の意味からであると言ってもよい。著者ビューラーはいずれの意味でも「文体」という用語を口にしてはいないのであるが、しかし彼の研究の深奥では絶えずこの概念に対する意識が原動力として存在したと思われるのである。

## 2 主観主義と客観主義

ビューラーの『言語理論』にはいたるところに様々な術語が見つかる。これらの語は、ある時はビューラー自身の手による造語であり、ある時は心理学をはじめとする専門分野から取り入れられたものであるが、『言語理論』ではちょうど大きな構造物を支える個々の部材のようにそれぞれが特殊な役割を担っている。しかしその他にもしばしば一般的に用いられる語でありながら、ここではさらに特別な意味を持たされている概

念がある。これらは本来ビューラーの『言語理論』の全体を貫く思想を知るための最も重要な手掛かりであるが、実際には読み手に対して謎解きを迫る一種のキーワードのようなものとしても働く。例えば『言語理論』の冒頭では次のように述べられている。

むかしの人々の客観的な言語観察へと私をひき戻したのは、近代の人々によってめざされ、その後しばらく価値を認められてきた主観性を補足する必要があるとの洞察であった。<sup>5</sup>

この種の暗示的な言い回しは、ビューラーの『言語理論』を難解にしている最大の原因であろう。しかも、ビューラーの他の著作と比較しても、とりわけ『言語理論』ではこの種の表現法が目につくように思えてならない。確かに、この部分を読んでもある種の漠然としたイメージを喚起されるだけであり、すぐに完全な意味での理解に至ることはあり得ない。著者の解答は即座には出されず、長い回り道を経てようやく見えてくるのである。言語学を「客観的な」科学の一種と考えるならば、『言語理論』の著者が用いるこのような文体的手法は不適切とみなされるかもしれない。しかし逆に言えば、与えられた概念の意味が十分に理解できないからこそ、読み手としてはかえってその概念の解説に注意を向けざるを得ないわけで、結果的にはそれによってさらにその概念自体の重要性が浮き彫りにされる。著者ビューラーはおそらくこのような一見回りくどい「文体」を意識して使っているであろう。『言語理論』を読んだ者が含蓄に富んだ「作品」のような印象をそこから受けるのは、この独特の「文体」のせいである。しかし同時に著者がこのような慎重な「文体」を選んだのは、言語という現象の多様性に対する配慮と、それと取り組む慎重な姿勢の証しでもあるように思われる。

いずれにせよ、引用に述べられた「主観性」と「客観性」という相関術語は間違いなく『言語理論』を貫く主要理念であり、『言語理論』の理解という読み手の作業は、この意味を明らかにすることで始めなければならない。

ビューラーの『言語理論』の特徴は、心理学者としての立場から見た

言語の運用面の実際が何よりも考察の中心に据えられている点にある。しかも、パウエルおよびソシュールを強く意識して、『言語理論』はまさしくタイトルの示す通り、言語資料の収集に終止せず、それらの背景にある理論的原理の追求を主題にした書物である。『言語理論』を読み続けてみよう。著者自身の歴史的展望によれば、ソシュールの『一般言語学講義』とともに『言語理論』の理論的枠組みの形成に最も深く関与するのは、フッサール(Edmund Husserl, 1859-1938)の『論理学研究』(1900/01)<sup>6</sup>である。

フッサールの説明は書物の性格から非常に一般的な形でしか与えられていないが、例えば、das Pferd という語が、「馬」という意味を保持しながら、ある時は「馬一般」を意味し、ある時は特定の「その馬」を指すことがあるように、様々な語や文法形式、あるいは一連の語が実際に一つの意味として理解される時の意味の類型論と、主体による意味付与の行為を支える要因との関係を念頭に描いていた。フッサールの意図は、従来の経験的な言語研究において、言わば自明のものとして不問に付された意味論的現象の根底にある論理的諸形式を体系的に示すことであり、この点が『言語理論』の主題と基本的に一致する。つまりビューラーは、フッサールが「純粹文法」の中心領域として想定していた意味形式の複合法則を、言語における意味の生成のメカニズムを具体的に説明するモデルに適用できると考えたのである。

ソシュールとの関係に戻ろう。『言語理論』の執筆に決定的なきっかけを与えたのは、ソシュールの『一般言語学講義』であった。とりわけ「ラング」と「パロール」の峻別と「記号学」(sémiologie)の提唱は、素材的思考からの解放を確実なものにし、「言語形成体」(Sprachgebilde)の理論的性格を明かにしたのである。これによって「主観主義」の立場は「客観主義」の立場に向かっての揺り戻しを受けることになる。ただしこれは一方の極から他の極へというような劇的な変動ではない。というのも、ソシュールにおいては、言語の社会的、慣習的性格を前面に打ち出すために、「ラング」が個人に依存しないことが強調されるが、ビューラーでは、記号間の差異や記号の体系よりもむしろ記号の意味作用の解明を目指すという力点の置き方の相違が問題となるからである。ソシュールの

立場とビューラーが『言語理論』で描いた「記号学」(Sematologie)との大きな違いはこの点にある。したがって、ビューラーにおいてはソーシャルの「ラング」の定義には次のような制限が加えられる。

このことがいつでも妥当するのは、ただある限界内でのことである。このことが妥当しない自由度の諸段階があり、そこでは真の意味付与が言語記号について行われている。創造力にとむ語り手によって新しい言い回しがもたらされ、それが共同体によって受け入れられるところでは、上述の独立性は妥当しない。<sup>7</sup>

つまりビューラーの「記号学」は、むしろあのフンボルト(Wilhelm von Humboldt, 1767-1835)が述べたエネルゲイアとしての言語、すなわち言語の動的性格を捉えることを目指す第3の立場であったと言える。

### 3 言語研究の諸原理と修辞学

ビューラーの『言語理論』では言語研究の原理が四つの公理から成る「公理論」として整理されており、その中心になるのは「オルガノンモデル」(Organonmodell)と「4場図式」(Vierfelderschema)である。「公理論」の成立はソーシャルの『一般言語学講義』との出会いが直接のきっかけであるが、構想に盛り込まれた見解の主要な部分は、ビューラーがかねてより独自に温めてきたものである。したがってここにまとめられた原理は、文字どおりビューラーの言語研究の真髄と言えるだろう。

「公理論」は明らかにソーシャルの『一般言語学講義』を強く意識して執筆されており、それだけにビューラーの言語研究の特質は、ソーシャルの学説との相違点によってより明確にすることができる。その意味からも、『言語理論』が出される前年に『カント研究』誌に発表された「公理論」<sup>8</sup>と、『言語理論』の第1章として書き換えられた「公理論」の二つを対照してみれば、そこに確認できる幾つかの追加や修正を手掛かりにして、ビューラーの理論が目指した方向を別の角度から裏付けることができるように思われる。

『言語理論』でまず目につく変化は、「オルガノンモデル」が「公理論」

の先頭に移されている点である。「オルガノンモデル」では、中央に言語記号を表す逆三角形を配置し、それを取り囲む「対象と事態」、「送り手」、「受け手」という三つの契機との関係から、記号は「象徴」(Symbol)、「症候」(Symptom)、「信号」(Signal)の3種類に区別され、それぞれの意味機能に「叙述」(Darstellung)、「表出」(Ausdruck)、「呼びかけ」(Appell)という異なる名称が与えられる。「オルガノンモデル」の原型は、すでに1919年に発表された文の機能に関する論文に確認できるが、「記号学」の観点からの図式化は、「抽象的有意性の原理」(Prinzip der abstraktiven Relevanz)との融合によってはじめて可能になった。この原理は、20年代後半にプラーク学派との交流を通して得られた音韻論についての知識に由来するもので、言語現象において記号として有意味に働く特性を、音韻論と音声学の区別に基づいて説明する。ただ、音韻論の基盤となったソシュールの学説、すなわち記号が「ラング」という抽象的存在体の中で他との関係においてのみ成立するという定義は、記号の慣習的・非実体的性格を意識化することにおいて確かに革命的なものであったが、反面、「ラング」と「パロール」の有機的關係が除外されていること、また実際の言語使用における記号の機能的多様性が考慮されていないことが、問題として残された。おそらくビューラーは、「オルガノンモデル」を「公理論」の最初に据えることで、ソシュールの学説の一面性を克服し、その代わりに記号の意味機能の多様性に注目を集めることの方が、言語の実際の科学的な研究に貢献できると考えたのであろう。

われわれの構成図式、言語のオルガノンモデルの決定的な科学的検証は、これら三つの相関関係、つまり言語記号がもつ三つの意味機能の各々が、言語科学にとっての現象や事実に固有の領域があることを示し、それを論議の対象にするときにもたらされるのである。<sup>9</sup>

また、もう一つの大きな変更は、言語の現象形式を「発話行動」(Sprechhandlung)、「発話行為」(Sprechakt)、「言語所産」(Sprachwerk)、「言語形成体」(Sprachgebilde)という四つの観点から規定した「4場図式」

である。最初に発表された「公理論」では、ソシュールの「ラング」と「パロール」に倣って「言語形成体」と「発話行動」の二つの面のみが区別されていたが、『言語理論』では「言語所産」と「発話行為」が加えられて四面体となった。これもソシュールの学説の大幅な修正であり、「オルガノンモデル」によって記号の意味論的機能の多様性が明示されたこととも、明らかに連動している。

「発話行為」によって示される現象は、フッサールについての記述で紹介した意味の類型論に属しており、主体が個々の具体的な「発話行動」においてどの意味の型を志向するかという問題とかがわる。このような行為論は、「言語形成体」による客観的制約に対して「意味分割の自由度を保証する」ものであり、そのために『言語理論』には欠かすことのできない部門として、「公理論」に追加されたのである。

「言語所産」についてはどうであろうか。ソシュールが「ラング」と「パロール」の区別によって、社会制度としての言語を具体的な言語活動に対峙させたのと異なり、ビューラーにおいては、具体的な言語活動も「発話行動」と「言語所産」という二つの概念によってさらに分類される。ビューラーによれば、「発話行動」とは「瞬間的な問題や生活境遇から求められる課題などを、語ることによって解決する」ことであり、一方の「言語所産」とは「所与のある素材を適切な言葉にまとめ、創造的に働く」ことを指す。したがって、「言語所産」は次のように説明される。

すぐれた言語所産は、たとえば第九交響曲やブルックリン橋やヴァルヘン湖の発電所のような、人間のその他の創造物と同じように、研究にとって重要な一度かぎりの、特別の質をもつ特徴を示している。そうした所産からは、創作者やその創作の特徴、その他の多くのことが学びとられる。<sup>10</sup>

よく知られているように、ギリシアの哲学者アリストテレスは、人間の活動をまず「理論」(Theoria)と「実践」(Praxis)に分け、さらに狭義の「実践」から「制作」(Poesis)を分離した。ビューラーによる「発話行

動」と「言語所産」の概念は、アリストテレスの古典的分類に、心理学の分野での子供の精神の成長段階に関する考察が結び付いて成立したものである。ある発達段階に達した子供においては、「構想を立てることで行いがもたらすものを先取りし、材料への加工が先を見越してコントロールされ始め、ついには所産が完成されない限りその行いはしばしば休止することがなくなる」<sup>11</sup>ことが報告されている。この事実を言語発達の問題に置き換えれば、素材がいかなる事件や体験であれ、それをどのように組み立てて筋の通った話しに仕上げるか、つまり話しのまとめ方(Fassung)がここでは最も問われるのである。

ビューラーが修辞学の遺産について触れているのは、『言語理論』とともに『表出理論』(1933)<sup>12</sup>においてである。『表出理論』は、身振りや表情の他、感情の表出等の人間生活に見られる音声言語以外の様々な言語的現象を「記号学」の一分野として扱っており、ビューラーは、この書物で弁論術、観相学、演劇学、医学、心理学等からの「表出」研究の歴史を概観し、それを通して「記号学」的体系を描き出そうとしたのであった。

『表出理論』の成立は、ヴント(Wilhelm Wundt, 1832-1920)が全10巻からなる大著『民族心理学』(1900)<sup>13</sup>の最初の2巻で「言語」について約1300頁に及ぶ詳細な考察を残したことに端を発する。ヴントはここで、人間の言語が表現運動から発達したとする独自の進化論的立場から、感情の動き、身振り、表情等の「言語的なもの」をすべて音声言語と同一のレベルで扱おうとしたのであるが、これに対してビューラーは、音声言語ではとりわけ「叙述」の機能が優位を占めるという観点から、ヴントによる一元論的解釈を退ける。つまり、ビューラーは『言語理論』と『表出理論』という2冊の書物を別々に著すことで、言葉や表情等のような人間の言語的営みの異なる領域では、「叙述」や「表出」の機能もそれぞれ異なる役割を果たしているという事実を、体系的に示そうとしたのである。

アリストテレスの『弁論術』は、厳密には説得と弁明を扱う「弁論術」と文彩(あや)を扱う「修辞学」の二つの領域にまたがっている。つまり、アリストテレスでは本来まとめて扱われていたものが、歴史的経過を通



じて分かれていったのであった。その後の「修辞学」の衰退は、表面的な分類にこだわり続けたことによる形骸化に起因するが、経験的言語研究が正当な学問としての地位を確立していったのとは対照的に、「修辞学」は19世紀の中頃には学問としての地位を完全に失ってしまったと言われている。この観点からビューラーの研究を眺めると、そこには独特の展望が開かれる。つまり「修辞学」および「弁論術」の問題は、『言語理論』と『表出理論』以前の論文ではまだ主要なテーマとしては登場して来ないのであるが、『言語理論』では、「言語所産についての科学という建物の中の新しい運動として昔の人が開始し、すでに非常に遠くまで展開させたものを再受容する傾向が、19世紀よりも強い」<sup>14</sup>と明言しているように、ビューラーの言語研究に潜在的にあった方向性が、「オルガノンモデル」を中心とする「公理論」の構想とともに、細分化し互いの関連を失った伝統的領域を理論的に再編成することで、次第に具体的な形に整備されていったのではないだろうか。『表出理論』で取り上げられている古典的伝統は、表情や身振り等の身体的「表出」に限定されるが、本来、アリストテレスの『弁論術』は言語的「表出」も含んでおり、ビューラーはそれらも理論的に整理できると考えていたようである。20世紀における新しい思潮の夜明けとともに、いわゆる旧修辞学が再発見される機はすでに十分熟していたのであり、この趨勢をいち早く察知し、自論の構成に活かすことを思い立ったのは、まさにビューラーの博識に基づく達見であった。ただし、実際に『言語理論』で扱われたのは「叙述」の面のみであり、その意味ではビューラーの研究は未完成であった。

#### 4 言語による叙述と文体論

ビューラーと言語とのかかわりは、彼自身も述べているように、研究生活の最も初期の段階にまで遡ることができる。すでに1909年に実験心理学の学会誌に発表された論文でも、言語の理解のプロセスが主題として取り上げられ、ヴントの主張する連合学説に対して反要素主義の立場からの反対意見が述べられている<sup>15</sup>。それによれば、ビューラーの見解の趣旨は、思考内容は刺激によって活性化された単なる概念の連鎖ではなく、聞き手の脳裏に主体的に形成された関係であるというものであった。

実はビューラーのこの考え方は、ヴェーゲナー (Philipp Wegener, 1848-1916)<sup>16</sup>の研究から多くを得ている。ヴェーゲナーは、言語を実際に使用される発話の状況の中で捉えようとする語用論的観点に立っており、これは当時としては非常に新しい考え方であった。例えば、ビューラーが上記の論文においてヴェーゲナーから引用している「haben+目的語」の構文について見てみよう。<sup>17</sup>

ドイツ語では、„mein Freund hat“の後に„ein eigenes Haus“, „einen scharfen Verstand“, „viel Glück“, „den Typhus“等の目的語が続き、これらのごく自然に受け入れられる。これらの例では主語と目的語との間に様々な関係が成立している。しかし実際には「habenに多くの意味があるのではなく、habenによって単に不確定に表現されたに過ぎない主語と述語の関係を、聞き手がその都度生産しなければならない」のである。つまり、ヴェーゲナーは「表現そのものの形式ではなく、聞き手の心理における結合の仕方が、語の意味を決定する」と考え、さらに、聞き手によるこのような主体的行為を支えているのは、発話の状況であることも強調した。例えば次のような文を考えてみよう。

Der Verein Concordia feiert am 7. Juni sein Stiftungsfest im Saale der Vereinigung zu Berlin. コンコルディア協会は6月7日にベルリンの統一の広間で創立記念祭を催します。<sup>18</sup>

これは新聞広告か何かで会員に記念式典への参加を呼びかけた文である。この広告を読んだ会員にとって重要なのは式典が行われる場所の報告だけであり、その他は伝達の要点を分かり易くするために役立つにすぎない。つまり場所の報告以外の部分は、長編小説や劇の「提示部」(Exposition)のようなものである。ヴェーゲナーによれば、「提示部」は既知の何かであり、これを前提として新しいもの、すなわち論理的述語が展開される。つまり「提示部」は述語と呼ばれるある種の行為を成立させる条件、あるいは、事実や事物が現れる土台または環境である。これらの状況は実際の発話では、言葉として表現される場合もあるが、それ以上に周囲の事情や先行する事実、あるいは関与する人物等の直接の

状況からなる場面として直観的に把握される場合が多い。このような見方そのものは、日常の言語生活のあらゆる場面で誰にでもごく普通に体験できる事実に基づいているが、その自明の現象を理論的に解明しようとした研究者は、ビューラー以前にはほとんどいなかった。ビューラーは、ヴェーゲナーの見解を基礎にしなが、ら、「場」の概念を導入することで、「叙述」理論の全体をさらに精密に構成しようとしたのである。

「場」という術語は、言語学ではトリーア (Jost Trier, 1894-1970) の語彙研究等にも見られるが、ビューラーの言う「場」はこれとの直接の関係はない。『言語理論』では、この術語が単一語として用いられることはほとんどなく、何らかの形容詞を冠して用いられるか、「象徴場」(Symbolfeld)、「指示場」(Zeigfeld)、「場」(Umfeld)のような合成語として用いられることが多い。「場」という概念は、元来は色彩についての学説から持って来られたもので、ある色彩で平面上に斑点を描いた場合、その斑点から受ける印象は常に周囲からの影響を受けるとい、う、ゲシュタルト心理学の原理に基づいている。

感覚の諸事実は、孤立しているのではなく、互いに影響しあう心的現象の「総体」へ埋めこまれ、あるいは植えこまれて現れてくるのが普通であり、それによっていろいろに修正・変更されるのである。<sup>19</sup>

この種の関係論的な捉え方は、いわゆる構造主義の方法論の原点であり、その意味ではビューラーの『言語理論』もまた同時代の他の諸研究と思想を明らかに共有していると言える。その上でさらに『言語理論』の独自性として強調すべき点があるとすれば、それは心理学者としての立場から見た発達論的考察と実際的な分析方法であろう。ビューラーは『言語理論』において言語による「叙述」を「指示」と「象徴化」という大きく二つの集合に分けて取り扱っているが、これも言語の起源に関する独特の見解から派生してきたものである。

『言語理論』ではこの区別に従って第2章で「指示場」(Zeigfeld)と「指示語」(Zeigwörter)の問題が、そして第3章では「象徴場」(Symbolfeld)と「命名語」(Nennwörter)の問題が論じられる。つまりビューラーは、

言語による「叙述」は、指示記号と概念記号が様々な「場」との相関によって生み出す意味論的なプロセスであると考え、これらの過程を分けて扱ったのである。もちろん現実の言語使用ではこれらの両方が混在するが、記号がどのような状況や文脈で使用されるかということ、すなわちいかなる「場」が関与するかということに応じて、それぞれの記号の使用形態が左右されることになり、これが広い意味での「文体」の問題と関係することになる。

ビューラーによれば、「指示」はすべて「ここ-今-私」(hier-jetzt-ich)という直観的秩序に基づいて行われるが、「場」との相関により、さらに3種類に区別される。第1番目は、「明視的指示」(Demonstratio ad oculos)と呼ばれ、指示される何らかの対象あるいは事態が、記号の送り手と受け手が共有する視界内に具体的に知覚できる場合のことである。第2番目は、「想定上の対象指示」(Deixis am Phantasma)と呼ばれる指示である。これは「眼前にはない記憶の世界、あるいは想像によって作り出される世界へと語り手が聞き手を導いていって、そこで同じような指示語によって、見たり聞いたりするように仕向ける」場合である。これはもちろん日常の言語使用にも頻繁に現れるが、特に文学や演劇等は、この「指示」と深くかかわる芸術分野である。演劇では、「舞台の役者は、眼前にないものを現前させて、劇の見物人に、舞台上にあるものをそこにないものの代わりとして示す」ことができ、叙事詩や物語では、「転移」(Versetzung)という方法によって「場」が再現される。例えば、ある小説の主人公がローマへ派遣されたとする。作家は「そこでその勇士は一日中集会場の中を歩き回っていた」と記すだけで、読者の視点を瞬時にローマへ移すことができる。第3番目は、「反復指示」(Anaphora)と呼ばれる指示で、これは「談話によって作られる文脈そのものが指示場へと高められていく」場合である。例えば、次の文を考えてみよう。

Alle Menschen sind sterblich. Caius ist ein Mensch. Also ist Caius sterblich. すべての人間は死すべきものである。カイウスは人間である。ゆえにカイウスは死すべきものである。<sup>20</sup>

この例では also という副詞が「反復指示語」として働いている。つまり「反復指示語」として用いられた語は、何らかの対象を指示するのではなくて、話し手が関与している談話そのものの一部を指示し、テキストを束ねる接合語として働く。したがって「反復指示」は、「指示」を「象徴場」との協調によって「叙述」に結び付けるという意味で、言語による「叙述」にとって非常に特徴的な現象である。次に「象徴場」について見てみよう。ビューラーはこれを次のように定義している。

言語は、人間の発声手段にとって可能な範囲において描写するのではない。それは象徴するのである。つまり命名語とは、対象についての象徴記号なのである。しかし画家が用いる色彩に画面が必要であると同じように、言語の象徴記号は、それらが位置づけられる環境を必要とする。われわれはそれを言語の象徴場と命名しよう。<sup>21</sup>

「象徴場」はさらに次の3種類に分類されている。例えば、喫茶店に座っている客は、店員に向かって、„einen schwarzen“（ブラック1杯）と言うだけで十分に意思を伝えることができる。日常の様々な場面では、文の断片だけでも状況の助けでやりとりが成立することがよくあるが、このような状況は「実践的な場」(empraktisches Feld)と呼ばれる。また、様々な商品に印刷された商標や、道標に書かれた地名、あるいは書物のタイトル等のように、命名されているものにしっかりと結び付いた名称があり、これらでは「癒着的な場」(symphysisches Feld)が問題となる。そして3番目は、言語による「叙述」にとって最も重要と考えられる「共義的な場」(synsemantisches Feld)である。これは一般的には「文脈」と言われるものを指すが、ビューラーはここに二つの要因を区別している。例えば、「図書館」という語であれば、「本」とか「建物」という具合に、個々の語はすべて他の語を連想させるが、ビューラーはこのような関係を「素材的補助」(Stoffhilfe)としてテキストを構成する重要な要因とみなす。もう一つの要因は「品詞」である。例えば、ある副詞が自分に見合った動詞を求めるように、ある特定の品詞に属する単語は、他の特定の品詞によって埋められなければならない「空所」(Leerstelle)を

周りに持っており、これもテキストを作り上げるのに基礎的な指示を与えている。このように「概念語」もまた「指示語」と同様に、実際に何らかの意味を生み出すところでは、必ず「場」の存在を前提とする。つまり、「言語による叙述は、意味の不確定性という遊びの部分であらゆる場合に残している」ものであり、「自然言語は高度に多義的な象徴記号を操作し、それらの意味を事実の側から精密化したり、変容させたりすることを期待している」のである。自然言語のこの特質は、たとえ科学的な著作における言語でさえも当てはまるものであり、日常言語や詩的言語ではその傾向は一層強くなると考えられる。

ところでビューラーによれば、人間の言語による「叙述」には、「場」との相関による意味生成のメカニズムから逃れようとする、もう一つの傾向が存在する。ビューラーはこれを「描写の傾向」(Maltendenzen)として取り上げ、「人間は、中間的な装置としての言語とその固有の法則のために、直接に見たり聞いたり触れたりできる多くのものから隔てられているのに気づく結果、できるだけ音声化を維持することによって元の道を逆戻りし、具体的な世界を完全に把握しようとするのだ」と説明する。例えば、klappern(がたがたなる)、ächzen(うめく)、jauchzen(歓声をあげる)、blöken(めえーとなく)等の擬音語や擬声語が数多くあることは、そのような傾向の証明である。実際はこれらも自然界の音を当該言語の音韻法則の支配を受けながら再現しているという点では、「象徴」としての言語による再現でしかありえない。しかし言語芸術では、この種の退行現象は重要な役割を果たす。例えば、次に挙げるシラーの詩を見てみよう。

Und hohl und hohler hört man's heulen...

Es waltet und siedet und brauset und zischt...

そして、一層うつろに風が吠えるのが聞こえる...

波は荒れ、わきたち、ざわめき、そしてささやいている...<sup>22</sup>

言語芸術家である詩人は、文法、語彙、そして音韻規則からなる構造法則に抵触しない自立的な変容可能性を駆使して、嵐や波のざわめき等

の、自分が耳にした生の音を模写しようと努めている。すなわち、先に指摘されたように、言語による「叙述」にはある種の自由度が認められる部分があり、とりわけ「言語所産」の領域では、この「遊びの部分」を巧みに利用することで様々な再現が試みられ、そこから優れた「作品」が創作されているのである。

さて、冒頭にも触れたように、ビューラー自身は『言語理論』において「文体」を主題として扱っているわけではない。しかし、既に見てきた通り、『言語理論』の内容が、いわゆる「文体論」の領域と明らかに重なり合っていることは否定できないだろう。アリストテレスによって築かれた「弁論術」あるいは「詩学」という古典的伝統を、近代的な意味で再構成するというビューラーの試みは、残念ながら亡命という予期せぬ出来事によって中断を余儀なくされ、しかも、ヤーコブソン等による「詩学」の研究に理論的な示唆を与えたという指摘を除いて、その全体像はほとんど見失われてしまうことになる。しかしこの点についてのみ一言付け加えておかなければ、プラーグ学派による詩の定義が、メッセージの形式的異化という操作を通して非慣習的な表現が作り出されるという、機能主義的な観点からのものであるのに対して、ビューラーにおける「文体的なもの」への関心は、それを単なる規範からの逸脱としてではなく、人間の創造的活動の最も重要な部分として捉えるという見方に由来している。つまりヤーコブソンにおいては、当初から詩的言語と日常言語という構図があり、記号の詩的機能、すなわち記号が記号自体を志向するという見方もそこから導かれているが、ビューラーでは、詩的機能自体が記号の機能モデルの中に設定されているわけではない。ビューラーにおいては、詩をはじめとする言語芸術作品は確かに特殊なものではあるが、それらは日常言語に対する異質なものとしてよりも、アリストテレスによる分類を強く意識した自然言語の本質としての創造性の発現形態の一つと考えられている。言い換えれば、「詩的なもの」あるいは「文体的なもの」をそれとして受け止め、共鳴することの根拠が、単なる言語上のメカニズムではなく、人間の持つ根源的な性向という心理学的な側面から説明されるのである。この意味において、ビューラーの研究からはむしろ、リチャーズ(Ivor Armstrong Richards, 1893-1979)

がかつて『新修辞学原論』(1936)<sup>23</sup>において提唱し、リクール(Paul Ricœur, 1913-)<sup>24</sup>へと継承された哲学的レトリック論との接点の方が多く感じられる。しかしまた同時に、「メッセージ」の詩的機能が「文脈」に依存するという点において、ヤーコブソンのモデルにも、ビューラーが『言語理論』で描いた「叙述」における「記号」と「場」の相互作用という考え方、とりわけ「共義的な場」の図式と重なり合う面も多く、両者の接点がただ単に「オルガノンモデル」に見られる記号の諸機能の区別にのみ限定されないことも明かである<sup>25</sup>。したがって、今後はこの方面からの再評価も、ビューラー研究の新たな展開にとって不可欠ではないかと思われる。

#### 注

- 1 Bühler, Karl: *Sprachtheorie. Die Darstellungsfunktion der Sprache*. Jena 1934. 邦訳『言語理論—言語の叙述機能』脇阪豊他共訳 1984年 クロノス. 引用箇所は原書のページを示す. ただし訳文は邦訳書による.
- 2 ヘルマン・バウル 『言語史原理』 福本喜之助訳 1965年 講談社.
- 3 フェルディナン・ド・ソシュール 『一般言語学講義』 小林英夫訳 1972年 岩波書店.
- 4 ロマーン・ヤーコブソン 『言語と言語科学』 ロマーン・ヤーコブソン選集 2 服部四郎編 長嶋善郎他共訳 1991年 大修館書店 185ページ.
- 5 Bühler 1934, S.1.
- 6 エドムント・フッサール 『論理学研究』 3 立松弘孝・松井良和訳 1985年 みすず書房.
- 7 Bühler 1934, S.58.
- 8 Vgl. Bühler: *Die Axiomatik der Sprachwissenschaften*. Frankfurt am Main 1969.
- 9 Bühler 1934, S.32.
- 10 Ibid., S.55.
- 11 Ibid., S.53.
- 12 Vgl. Bühler: *Ausdruckstheorie. Das System an der Geschichte aufgezeigt*. Stuttgart 1968.
- 13 Vgl. Wundt, Wilhelm: *Völkerpsychologie. Eine Untersuchung der Entwicklungsgesetze von Sprache, Mythos und Sitte*. Leipzig 1900.



- 14 Bühler 1934, S.55.
- 15 Vgl. Bühler : *Über das Sprachverständnis vom Standpunkt der Normalpsychologie* aus. In : Bericht über III. Kongreß für experimentale Psychologie, 1909.
- 16 Vgl. Wegener, Philipp : *Untersuchungen über die Grundfragen des Sprachlebens*. 1885 ; Amsterdam 1991.
- 17 Bühler 1909, S.121.
- 18 Wegener 1991, S.19.
- 19 Bühler 1934, S.154f.
- 20 Ibid., S.389.
- 21 Ibid., S.150f.
- 22 Ibid., S.202.
- 23 I. A. リチャーズ 『新修辞学原論』 石橋幸太郎訳 1961年 南雲堂.
- 24 ポール・リクール 『生きた隠喩』 久米博訳 1984年 岩波書店.
- 25 ヤーコブソン 『言語学と詩学』 川本茂雄監修 長島善郎他共訳 『一般言語学』 1984年 みすず書房 183ページ.

#### その他の参考文献

- S.K.ランガー 『シンボルの哲学』 矢野萬里他共訳 1972年 岩波書店.  
 アリストテレス 『弁論術』 戸塚七郎訳 1995年 岩波書店.  
 アリストテレス 『詩学』 松本仁助・岡 道男訳 1997年 岩波書店.  
 アリストテレス 世界の大思想 20 『アリストテレス, ニコマコス倫理学・詩学』 村治能就訳 1974年 河出書房新社.  
 佐藤信夫 『レトリックの消息』 1987年 白水社.  
 ピエール・ギロー 『文体論 —ことばのスタイル—』 佐藤信夫訳 1995年 白水社.  
 ジョルジュ・モリニエ 『文体の科学』 大浜 博訳 1994年 白水社.  
 山中桂一 ヤコブソンの言語科学 I 『詩とことば』 1989年 勤草書房.  
 Vonk, Frank : *Gestaltprinzip und abstraktive Relevanz*. Münster 1992.  
 Black, Max : *Die Metapher*. In : *Theorie der Metapher*, hrsg. von A. Haverkamp, Darmstadt 1983, S.55ff.

# Karl Bühlers *Sprachtheorie* und die Stilistik

Kiyoshi YAMADORI

Karl Bühlers *Sprachtheorie* beginnt mit einer kurzen Skizze der Geschichte der Sprachwissenschaft um die Jahrhundertwende. Er nennt dabei drei Werke, *Prinzipien der Sprachgeschichte* von Hermann Paul, *Grundfragen der allgemeinen Sprachwissenschaft* von Ferdinand de Saussure und *Logische Untersuchungen* von Edmund Husserl. Jedes der Werke hat seine eigene Auffassung über die Sprache, die ihrerseits die Persönlichkeit des Verfassers in jeder Hinsicht spiegelt. Bühler wollte mit diesem Vergleich seine Leser vor allem auf verschiedene Auffassungen aufmerksam machen und damit zugleich den Standpunkt seines Buches und dessen geschichtliche Stellung kennzeichnen. Aber es ist nicht immer leicht, auf den ersten Blick den eigentlichen Zweck des Werkanliegens zu begreifen.

Dies liegt am umfangreichen Inhalt und einer andeutenden Ausdrucksweise. Es gibt jedoch auch Eigenschaften, die das Buch deutlich von anderen Arbeiten im gleichen Bereich abheben. Es ist nicht zu verneinen, daß das Werk verschiedene Gedanken anderer Forscher enthält und dadurch oft auf seine Leser einen unverständlichen Eindruck macht. Dies zeigt sich etwa darin, daß der Leser zwar mit dem Namen Organonmodell vertraut ist, aber damit die Gesamtstruktur einer *Sprachtheorie* schwer beschreiben kann. Roman Jakobson, der mit Bühler verkehrt hatte, sagte, seine *Sprachtheorie* sei eine der sinnvollsten von allen Arbeiten, die bisher die Psychologie der Sprache behandelt hätten. In der Tat haben Bühlers Auffassungen hierin späteren sprachlichen Forschungen viele bedeutende Ansätze

gegeben und die Modernisierung der deutschen Sprachwissenschaft gefördert. Trotzdem ist noch schwer zu sagen, daß seine spezifische Sprachanschauung bisher eine zutreffende Einschätzung gefunden hat. Der Entwurf, den Bühler damals anfertigte, scheint heute fast aus den Augen verloren zu sein.

Dieser Aufsatz versucht den Aufbau des Hauptwerks von Bühler korrekt zu beschreiben und das Gesamtbild seiner Studien wieder sichtbar zu machen. Dabei soll der Begriff Stil eine Rolle spielen. Dies hängt mit der Tatsache zusammen, daß man in den bisherigen Auseinandersetzungen mit Bühlers *Sprachtheorie* auf den Zusammenhang mit der Stilistik kaum geachtet hat. Doch hatte Bühler in Wahrheit großes Interesse an der klassischen Rhetorik sowie an der Poetik von Aristoteles. Er hatte sogar die Absicht, die Tradition, die in der Mitte des 19. Jahrhunderts ausgestorben war, als moderne Wissenschaft wieder auferstehen zu lassen. Deshalb werden seine Arbeiten hier besonders aus dieser Sicht beleuchtet, um einen neuen Ansatz in die Bühler-Forschung zu tragen.